

【口頭発表】
「学習者主体」から
「ことばの市民」へ

—ポリティクスとしての歴史と革新—

細川英雄（言語文化教育研究所八ヶ岳アカデミア）

2017年2月26日（日）言語文化教育研究学会第3回年次大会
関西学院大学上ヶ原キャンパス

本発表の流れと構成

- 「学習者主体」から「ことばの市民」へーポリティクスとしての言語文化教育の歴史と革新
- 1990年代後半からのムーブメントとしての言語文化教育ーことばと文化の教育を人間科学として捉えようとする潮流
- 1995年の「学習者主体」提案から20年、人間形成の課題としての「ことばの市民」という概念の提案
- キーワード
言語文化教育， 市民性形成， アイデンティティ， 自己のテーマ， 個と社会の循環

1. 言語文化教育とは何か

1.1 言語文化教育という分野への気づき —「日本事情」と1995年体験から

- 「言語文化教育」—G.ザラトの研究会Pluralité des Langues et des Identités en Didactique : Acquisitions, Médiations (PLIDAM)-1995年体験から (細川, 2012b)
- 「日本語」科目-言語の学習は言語の形式や構造あるいは機能と場面との関係 / 「日本事情」科目—社会・文化に関する知識・情報(細川, 1999、細川, 2012a)
- 言語を使って表現することとは何か一言語も文化も、本来、学び手の中に内在するものではないかという仮説 (細川, 2012b)

1.2 文化を個に内在するものとして捉える

- 学び手自身の考え方や価値観によって、対象としてのモノや現象が、それぞれ異なるもののように見える
- 文化は、個人の内部にその人のイメージとして存在する一個人の外側に実体として存在するのではない
- 文化を学ぶ一個人の内部にある自らがつくりあげたイメージとそれを形成する感じ方や考え方あるいは価値観に気づく—外部にある実体としての文化情報を受け取ることはない（細川，2002）

1.3 言語活動は、言語と文化の統合体

- 言語と文化の一体化へ(細川, 2012a、細川・三代, 2014)
- 各自の価値観は、言語による活動として他者に向けて表出される一言語活動において言語と文化は統合され、一つのものとして表現される
- 言語活動そのものを言語文化活動、その活動の場を形成することが言語文化教育 (細川, 2002)

2 「学習者主体」の提案

2.1 「学習者中心」への疑問

—教師はなぜ正解を握っているのか

- **学習者中心** — 教師主導に対し、正解を得るためのプロセスとして学習者が中心的に活動することにより、活動の効率性や定着度を高める — 学習者自身のより高い言語能力習得の向上が目的
- **学習者主体** — 学習の主体である学習者の認識は学習者自身のもの、どのような答えを引き出すかは学習者自身の問題 — 教育そのものの質的転換をめざす — 1995年に言語文化教育概念として提案
- 言語教育における「言語能力の向上」という目的論をどのように超えるか (細川, 2012b)

2.2 言語活動によって人は何をめざすのか

- 学習者主体への誤解－例：学習者が主体的に（自分から進んで積極的に）学習活動に参加する－言語習得の効果と効率性の枠内での議論－言語教育の持つ権威性・閉鎖性のポリティックス
- 言語活動とは何かという問い－言語と文化の統合的な活動により、人は何をめざすのか
- 言語と文化の統合的な活動それぞれの－それぞれの社会において社会的行為主体として他者とかわること－日常生活の中で自覚的になること
- 学習者主体からことばの市民へ－内なるイメージによる規定から自由になること－自己・他者・社会という構図デザイン

3 ことばの市民の構想

3.1 自己・他者・社会の世界へ

- ことばの市民 – 言語活動によって一人の市民であること
- 市民 – 自己と他者との関係において、自分が社会の一員であることを自覚する個人の認識のあり方
- 市 – 広くことばの活動として言語を使用するものにとっけて、公的な場はすべて「市」、その公共の場における個人こそ市民
- ことばの市民になる – 社会における言語活動にこよって市民としての意識、すなわち市民的態度を自覚する

3.2 言語教育における公共性とは何か

- 公共性－個人が他者に向けて発信する場のあり方
- 社会－個人が関わる、さまざまな複合的、重層的な複数のコミュニティの総体
- 言語文化教育としての公共性と市民性形成－「公共」言語教育の展望それ自体が、広い意味でのポリティックスーそうした理念がどのように具体的な活動実践と結びつくか（細川・尾辻・マリオッティ，2016）。

3.3 ことばの市民になることの意味

- 「個の文化」(細川, 1999)が相互的かつ複雑に交差しあう関係のあり方のなかで、言語活動の場を形成する、市民性形成の一環としての言語文化教育
- 平和で幸福な社会をめざして、対等な関係の下で、人がともに生きていくための不可避の課題としての相互文化教育 (intercultural education)
- ことばの教育とは、「言語を教える」ことではなく、「ことばによって活動する」場をつくること—個人一人一人が、ことばによる活動を軸に、他者を受け止め、テーマのある議論を展開できるような場(共同体)を、どのように構築していくか—自己のテーマとバイオグラフィの可能性

3.4 自己のテーマとアイデンティティの関係

- 市民性形成の教育理念—自律的な個人が、価値観の異なる他者との協働・理解のなかで、自己を表現し、ともに住みよい社会をつくっていくこととするアイデンティティ意識の形成
- 自己テーマの発見—複数及び重層的集団の中で、個と社会を循環する、自己のテーマ—例：欧州評議会「相互文化的出会いの自分誌」のようなバイオグラフィの対話活動実践
- 自己テーマの探求—他者との対話によって導き出される検証的思考—実践—新しい「私」に変容するための装置—思考と表現を活性化させる言語活動（西山・細川・大木，2015）。

3.5 ことばの市民になるための対話

- 自己のテーマ発見とその環境デザイン（細川・尾辻・マリオリッティ, 2016）
- 興味・関心への観察／「なぜ」という問い／他者の自由の承認
- それぞれのテーマによって生まれる対話／他者との協働による新しい社会の構想
- 総合活動型日本語教育のバイオグラフィ的位置づけ(牲川・細川, 2004)

4 ポリテックスとしての 言語文化教育の歴史と革新

- 学習者主体からことばの市民への歴史と革新の意味－人間の学としての言語文化教育学の新しい展開
- 言語能力の向上の先に存在する、人間形成の課題としての市民性形成概念を教育の目的とする
- 言語教育の閉鎖性・権力性から脱する、社会変革としての言語文化教育学のインクルーシブな方向性－言語文化教育のポリテックス

引用文献

- 細川英雄 (1999) . 『日本語教育と日本事情—異文化を超えて』 明石書店.
- 細川英雄 (2002) . 『日本語教育は何をめざすか—一言語文化活動の理論と実践』 明石書店.
- 牲川波都季・細川英雄(2004). 『わたしを語ることばを求めて—表現する希望』 三省堂.
- 細川英雄 (2012a) . 『研究活動デザイン』 東京図書.
- 細川英雄 (2012b) . 『「ことばの市民」になる—一言語文化教育学の思想と実践』 ココ出版.
- 細川英雄・三代純平 (編) (2014) . 『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』 ココ出版.
- 西山教行・細川英雄・大木充 (編) (2015). 『異文化間教育とは何か—グローバル人材育成へ』 くろしお出版.
- 細川英雄・尾辻恵美・マルツチェラ・マリオッティ (編) (2016). 『市民性形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて』 くろしお出版.